

A close-up photograph of several camellia flowers. In the foreground, a large, fully bloomed white flower with many layers of petals is the central focus. Behind it and to the sides, there are other flowers in various stages of bloom, some showing light pink or lavender hues. The background is dark and out of focus, highlighting the intricate details of the flower petals and the green leaves interspersed among them.

ASCA Bulletin

2014 vol.

6

アスカコーポレーション広報誌 ASCA ブレティン

〈特集〉チェッカー座談会

クライアントのゴールをチームで共有

- ・ AMWAレポート：AMWA 年次総会参加報告
- ・ 翻訳ヒヤリハット事例集
- ・ サイエンス誌最新情報：抗糖尿病薬スルホニル尿素の作用メカニズム

株式会社 アスカコーポレーション

特集：チェッカー座談会

クライアントのゴールを チームで共有

クライアントが求める品質を実現するために、チェッカー（翻訳校正者）の存在は欠かすことができません。今回の座談会は、ASCAのチェッカーを代表して、橘尚子さん、平尾文美メアリーさん、染矢尚美さんの3名に参加いただき、チェックとはどのような仕事なのか、品質を維持するためにASCAのチェッカーが日頃どのような思いでチェックを行っているのかを語っていただきました。

■ パネリスト：

アスカコーポレーション
シニアチェッカー

橘 尚子 さん

アスカコーポレーション
チェッカー

平尾 文美 メアリー さん

アスカコーポレーション
チェッカー

染矢 尚美 さん

アスカコーポレーション営業部
プロジェクトマネージャー

佐野 仁信

■ モデレータ：

アスカコーポレーション営業部
QC コーディネーター

伊藤 聡子

伊藤：まずはどのようにチェックされているかお聞かせください。

平尾：まず翻訳文だけを見て全体を確認します。例えば、最初にガイドラインや用字例に合っているか、レイアウトが崩れていないかといった観点で翻訳文を通して読み、その後に元原稿と翻訳文を突き合わせる細かいチェックを開始します。全体像を把握することで気になる箇所を早く見つけて、必要であれば早く翻訳者へ返すこともできます。

チェッカーは最初の読者です。少しでも引っかかる場所があれば、きちんと確認しておくことが重要だと思います。そうでなければ、クライアントが読んだときに同じところで引っかかるはずですから。

橘：私も最初に翻訳文だけを読んで、文体の読みやすさ、翻訳の精度を確認します。投稿論文を扱うことが多いため、原稿がターゲット誌の投稿規定やスタイルに合っているか、セクションごとに必要な情報が含まれ、論文としての体裁が整っているかなどを最初に確認します。足りない情報や疑問点があれば、プロジェクトマネージャー（PM）を通じて、早い段階でクライアントに確認してもらいます。作業の効率化のためにもやはり最初の段階で全体を見るのは重要です。

染矢：複数の翻訳者やチェッカーと作業する案件も多く、その際に問題となるのが用語や表現の統一です。クライアント特有の専門用語の使い方が統一されていないと、その翻訳文全体の品質が疑われることになります。納品前に慌てることのないよう、翻訳者に確認したり、他のチェッカーと頻繁に連絡を取りながら、早い段階で情報を共有するように最大限の注意を払っています。

橘：情報の共有という点について言えばクライアントからたくさ

んの参考資料をいただくことがあります。クライアントによって重要視するポイントは異なりますから、その都度PMに優先順位を確認してもらっています。あくまで参考程度にとどめ、翻訳者の判断でよりよい表現があれば変更しても問題ないのか、もしくは必ず合わせなければいけないのか、というポイントの見極めが鍵となります。

伊藤：チェックと言っても、誤訳や抜け、数字ミスを確認するだけでなく、ガイドラインやテンプレートに合わせる、日本語の読みやすさを確認するなど様々な作業が含まれます。まさにチェッカーは翻訳校正者です。それでは、チェックをするうえで常に心がけているポイントをお教えてください。



橘 尚子 さん

チェッカー歴：8年

所属：大阪

シニアチェッカー。あらゆる分野の文書のチェックを経験し、最近では主に投稿論文の規定合わせ、臨床試験登録業務のフォーム作成なども担当している。漢方、鍼灸などの抄録を英文化する東洋医学プロジェクトの運営に当初より関わり、中核メンバーとしてこれまでに400本を超える論文に対応。文章の整合性に関わる的確な指摘など、翻訳者、プロジェクトマネージャー（PM）から絶大な信頼を得ている。現在、経験と知識を生かして後進を指導中。

平尾：チェックは裏を取るための作業が大部分を占めると思いますし、根拠のない修正をしてはいけません。独断による勝手な手直しをしないということを新人の方にも伝えていますが、自分でも強く意識しています。そのために日頃から業界の動向やクライアントの開発状況、マニュアルスタイルなどを正確に把握して、その根拠になるものを自分の中に蓄積しています。自信を持って指摘したり修正したりするためには、自分自身が知識を持つことが必要です。勉強が必要なのはチェッカーも同じです。翻訳者だけではなく。

橘：その通りですね。私がチェッカーになった頃、この仕事は10年でやっと基礎ができると言われました。その10年がそろそろ目の前に近づいてきていますが、まだ足りないと思っています。用語は時代とともに変わっていきますし、吸収するべき新しい知識が次々に必要になります。気を抜かず常に勉強する姿勢を持っておかないと、せっかく長い時間をかけて得た知識もすぐに意味のないものになってしまいます。

染矢：翻訳者はよく考えたうえで訳出しているのですから、その訳文を最大限活かすのがプロの仕事だと理解しています。そのうえで納品物の完成度を上げるのがチェッカーの務めです。

橘：そうですね、私も翻訳者に対しては、常に尊敬の念を持ちながらチェックしています。正確な訳文を作るために、翻訳者は徹底して調べ抜いて、1つの案件に特化してじっくり向き合っています。そこにかける労力には、頭が下がる思いです。一方で、チェッカーは翻訳者よりも数多くの文書に触れているため、翻訳者よりもう少し広い見方を持ち、文書の位置づけや前後の流れを把握することができます。そのような別の視点から、翻訳者にアドバイスすることはあります。

伊藤：すべてのチェッカーが常に意識しなければいけないことは何でしょうか？

橘：文書が存在する意味や、納品後にどのように使用されるかということは常に意識しなければいけません。治験文書であれば、新薬の開発にかかる費用は膨大ですし、上市が一日遅れる



ことでクライアントに多大な損失をもたらします。同じような領域の薬で申請を急いでいる競合他社もあります。そのような現状をチェッカーもよく理解することが必要です。そうすれば、どうして短納期で納品する必要があるか、またミスがどれだけ許されないかということがおのずとわかってくるはずです。

平尾：クライアントが望むイメージをPM、翻訳者、チェッカーが同じレベルで共有したいですね。クライアントに満足してもらうには、希望のイメージにしっかりと沿って、納品物を仕上げるのが大切です。案件について一番よく知っているクライアントが作業すれば正確なものができることを、あえて私たちに外注してくださっている。その背景を理解して作業することも必要です。

染矢：クライアントからいただくフィードバックは大切な財産です。特異な表現や用語など、せっかくの貴重な修正を次の案件に生かすことでクライアントの信頼を勝ち得たいと常に意識しています。

伊藤：PMの立場からどのように感じましたか？

佐野：PMの理想は、納品した文書がクライアントの手に渡った後、ほとんど修正なしで使っていただくことです。そのためには、クライアント、PM、翻訳者、チェッカーがチームとなって案件に取り組むことが必要です。ASCAでは、各PM、QC（品質管理者）が担当クライアントを持ち、品質の維持向上に努めています。PMとQC担当者を中心に、チェッカーや翻訳者とチームを組み案件を積み重ねていくことで、クライアントの意向を的確に反映できるようにしたいと考えています。



平尾 文美 メアリー さん
チェッカー歴：7年
所属：大阪

ボリュームの多い治験文書関連の経験が豊富。チェックだけでなく、複数のチェッカーとの共同作業時は自らが取りまとめ役となり、仕上げのブレを防ぐテクニックは絶妙。クライアントごとのスタイルガイドを熟知し、限られた時間の中で最大の効果を出すスキルには定評がある。持ち前のコミュニケーション力の高さから、率先してPMから情報を引き出していく。医学知識、特に精神科領域には絶大の信頼がおける。



染矢 尚美 さん
チェッカー歴：3年
所属：東京

東京事務所の設立当初から参加し、東京のQC体制確立の一端を担う。治験関連文書や論文をはじめ、SOP、MR教育用資料、プレスリリースなど数多くの文書のチェックに携わる。対応分野は、がん、アレルギー、心血管疾患、糖尿病、ワクチン、人工関節など多岐。勉強会には毎回出席し、知的的好奇心旺盛である。努力を惜しまない勉強熱心な姿勢から、日々対応可能な文書や分野を広げつつある。

伊藤：チームとして機能するには、クライアントと直接やりとりをしているPMがうまく潤滑油としての働きをしなければいけませんね。

橘：そうですね。チームとなって取り組むには、やはりPMがクライアントとチェッカーをしっかりとつなぐことが不可欠です。チェック中に文書全体に関わるような訳語について確認したいことが出てきた際、担当PMがすぐにクライアントに質問を投げかけてくれ、すぐに返事をいただくと、その後の作業が迷いなくスムーズに進み、ひいては品質の向上につながります。

染矢：チェッカーは自宅で黙々と一人で作業をするイメージがありましたが、積極的なコミュニケーション能力が必要だと感じます。チェックをしていて気になる点があったときに、自分で勝手に判断するのではなく、きちんとPMや翻訳者に確認する、またはPMを通してクライアントに確認してもらうという姿勢は常に持っていたいですね。

佐野：クライアントとの距離が縮まれば、仕事をするうえで翻訳者やチェッカーのモチベーションも上がると思います。そのためにPMは努力を惜しんではいけませんね。

染矢：リピートオーダーが来たら、PMと同様に嬉しいですね。クライアントから評価されたんだなと感じられることが次の仕事への活力になります。

橘：背景や希望を細かくお聞きするためにPMと一緒にクライアントを訪問することがあります。PMだけでなく、チェッカーも直接きちんとクライアントの思いを把握することで、それを翻訳者やネイティブプルーフリーダーと共有し、完成度の高い仕事に近づけることができます。クライアントとのコミュニケーションができると、クライアントの思いに応えたいという責任感につながります。時間やタイミングが許せばチェッカーもクライアントに直接会う機会が持てるといいですね。



佐野 仁信



伊藤 聡子

平尾：チェッカーの仕事の醍醐味は、文書を最終形まで仕上げていくところだと思います。

文書をただバトンのように右から左へ流すように作業するのではなく、クライアントの希望するイメージを共有して形にしていけることが嬉しいですし、その結果クライアントに喜んでもらえれば、そして患者の助けになればこの上ないやりがいとなります。やはりチームワークが重要ということですね。

佐野：そうですね。ASCAが考えるベストな納品を目指すのではなく、クライアントが求めているベストは何かというのを共有することが一番大事だということです。

伊藤：ASCAのチェッカーは翻訳の品質を支える要です。以前は、翻訳者になりたかったけど無理だからチェッカーをする、という方も見受けられましたが、今ではチェッカーという仕事に誇りを持って、チームとして仕事をしようというプロ意識の高い方ばかりです。そうした熱意によってASCAは支えられていると実感しました。今後一緒に力を合わせていきましょう。



撮影場所：アスカコーポレーション 大阪本社

AMWAレポート

AMWA年次総会参加報告

AMWA* (American Medical Writers Association) の年次総会に、初めて参加しました。今年の開催地はオハイオ州コロンバス。計4日間、延べ80のワークショップ、72のオープンセッション、ラウンドテーブルディスカッションなど朝から晩まで盛り沢山のスケジュールの中から、自分に必要なセッション、好みのセッションに参加できます。ASCAが参加した興味深いテーマについてご紹介します。

ワークショップ

AMWAのメインイベントであり、certificate取得を目指す方には参加必須のセッションです。基礎的な英語の構造・文法を論理的に学ぶセッション、日本人にとっては使い慣れないコンマ、ピリオド、コロン、セミコロン、さらに難しいハイフンとダッシュのようなPunctuationを学ぶセッションなど、英語と日本語の構造の違いを目の当たりにします。同時に、日本語の場合も書き手や読み手によって読みやすい文章の感覚が異なるように、英語でも多種多様な文章の作り方があることを実感します。

今回参加したセッションの中で一番の難関はParagraphingでした。Paragraphとは何なのか？なぜ必要なのか？ポイントは、VisuallyとLogically。改行で一呼吸入れたり、文章の流れを順序立てたりすることで、読みやすく、頭に入りやすくなります。日本語を書く際にも役立つポイントです。



オープンセッション

メディカルライターとしてフリーランスになる方法、SNSの活用、安全性報告に関するレギュラトリーの変化、SWOT分析の活用、Structured Writing、健康管理法などトピックは多岐に渡ります。

ラウンドテーブルディスカッション

ライターがAMWAに参加する理由の1つはネットワーキングです。多数あるネットワーキングのチャンスのうちの1つが、ラウンドテーブルディスカッションです。トピックごとにテーブルに分かれ(各テーブル8人程度)、食事をしながらディスカッションを行います。

今回参加した1つが「Publishing a Physician-Targeted Newsletter」でした。そこで議論したライティングの重要ポイントは、1. 読み手が誰か、2. 予算(予算によってどこまで仕上げるか、手間をかけるかが変わるため大事な要素の1つ)、3. 見た目のデザイン(忙しい人に目を通してもらう工夫→表紙のイメージ、色のコントラスト、文字の配置、裏表紙の活用など)、です。ASCAでは、翻訳の際に、翻訳の目的と翻訳後の読み手が誰なのか、常に意識しています。ライターでも翻訳者でも、文書を作り上げるという目標は同じなので意識の重点も同じだということがわかります。

ライティングと翻訳は、仕上げるゴール、集める資料も異なります。両方の業務を手がけるASCAにとって、今回AMWAに参加することによりその違いをどのように埋めるかについてのヒントが得られた気がします。英訳では英文作成の基礎知識や悩みのタネの解決のヒントを見つけられます。また和訳でも、文章構成に対する考え方や概念を身につけたり、論理的に文章の意味を読み取ることを学んだりといったように、角度を変えて翻訳について考えるきっかけになるのではないかと思います。ぜひ一度、参加してみたいかがでしょうか。

(筆者：シニアプロジェクトマネージャー 坂本 奈央)

*AMWAとは

American Medical Writers Association (米国メディカルライター協会) の略称で、1940年設立、会員は30ヵ国、5000人以上。certificateプログラムがあり、必要単位を揃えることでcertificateを取得できる。また、年次総会は毎年異なる場所で開催されている。

翻訳ヒヤリハット事例集



ASCAの翻訳QC担当者が日々の業務中に出くわした、思わずヒヤリとした事例と、その対処法をご紹介します。

■ 第4回 翻訳支援ツールの問題：高マッチセンテンスにこそ御注意を！

翻訳支援ツール（CATツール）は便利な道具です。うまく使いこなせば、作業者の負担が大幅に軽減され、作業スピードも格段にアップします。ライフサイエンス翻訳の分野では普及率はまだまだですが、今後、使用される方の数が増えこそすれ、減ることはまずないのではないのでしょうか。

ところが、どんな有用な道具にも落とし穴はあります。まさに便利さゆえのワナが。

CATツールを使って翻訳した、いわゆるバイリンガルファイルをチェックしていてヒヤリ！とする瞬間は、実は低マッチよりも高マッチのセンテンスで多く訪れます。TMとの一致率が100～85%あたりの文章に大きなミスが潜んでいることが多いです。

一番よくある種類のミスは、TMから訳文を引っ張ってきて、（おそらく）そのまま見直しも修正もせずに放置してしまったと思われるパターンのもので、一致率が高いせいで安心してしまったのか、後でまとめて見直そうと思って忘れたのか……。部分一致（一致率が100%未満）のセンテンスの場合、TMから取得した訳文に何らかの手直しが必要になることが多いですが（文章要素の追加・削除、訳語の変更、構文の組換えなど）、そうした作業の跡がまったく見られない訳文が素知らぬ顔でまざれ込んでいたりします。

また100%マッチの場合も、そのセンテンス単独で見れば誤訳ではないが、文脈上明らかに不適切と思える訳文が居座っていることが時々あり、これもまた肝を冷やします。

逆に一致率が低い箇所や0%の箇所では、それほど大きなエラーは見られない傾向があるようです。TMが活用できず、実質ゼロから訳文を作らなければならないため、かえって丁寧に原文に注意を払うことになるからでしょうか。

■ 翻訳者の皆様へ

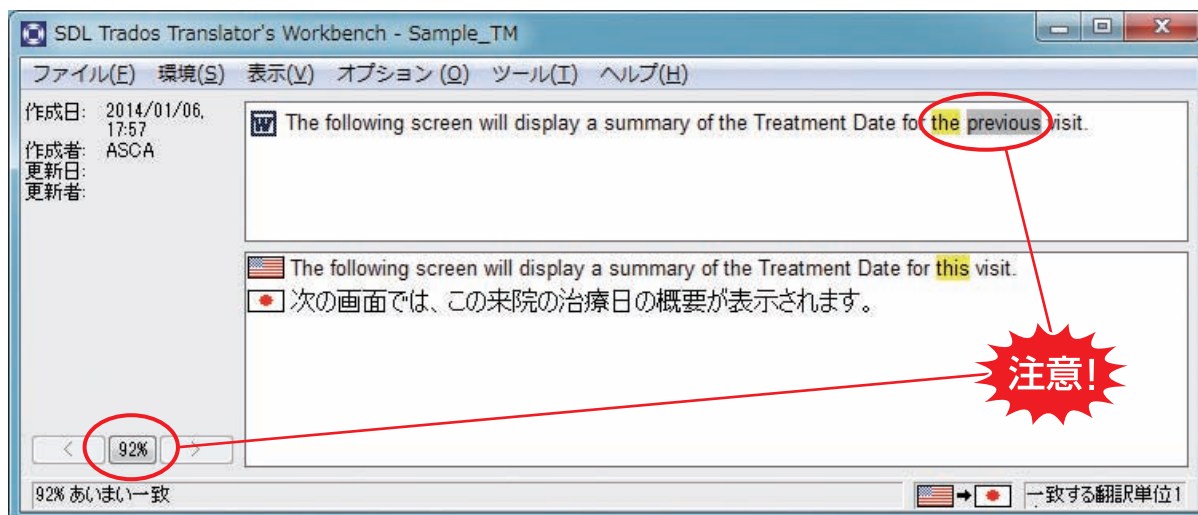
一致率が高いセンテンスにこそ慎重になっていただければと思います。

クリック1つで（最近はファイルを開いた瞬間ひとりで）訳文を呼び出せる機能はたいへん便利なものです。作業がノッてスピードアップしてくると、それに合わせてマウスの操作もリズミカルになり、勢いを殺して立ち止まるのが惜しくなる経験は筆者にもあります。一致率が100%だから、あるいは95%もあるからまあ大きな間違いはないだろう、後で余裕があれば見直しておくか……ついそんな気持ちになってしまう。そこが落とし穴ではないのでしょうか。

チェックをする場合も、やはり一致率が高い箇所には気が緩みがちなことは否定できません。途中で上記のようなエラーに気づいて、あわてて冒頭に戻って全体を見直したこともあります。

人を助けるはずのツールのせいで、かえって品質が落ちてしまっただけは元も子もありません。TMによって労力を省けた箇所にこそ細心の注意を払う、という逆転の発想はいかがでしょうか。意識の置き所を少し変えるだけで未然にミスを防げるはずです。

そうすれば鬼に金棒、CATツールがますます強力な武器になるだろうと思います。



抗糖尿病薬スルホニル尿素とcAMPは協調的にEpac2Aを活性化する Antidiabetic Sulfonylureas and cAMP Cooperatively Activate Epac2A

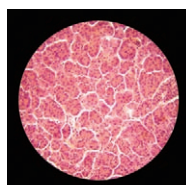
Toshimasa Takahashi^{1,2}, Tadao Shibasaki³, Harumi Takahashi¹, Kenji Sugawara^{1,2}, Aika Ono³, Naoko Inoue⁴, Toshio Furuya⁴, and Susumu Seino^{1,2,3*}

1 Division of Molecular and Metabolic Medicine, Kobe University Graduate School of Medicine, 7-5-1, Kusunoki-cho, Chuo-ku, Kobe 650-0017, Japan.

2 Division of Diabetes and Endocrinology, Kobe University Graduate School of Medicine, Kobe 650-0017, Japan.

3 Division of Cellular and Molecular Medicine, Kobe University Graduate School of Medicine, Kobe 650-0017, Japan.

4 PharmaDesign Inc., 2-19-8, Hatchobori, Chuo-ku, Tokyo 104-0032, Japan.



©aneps omar™

Abstract

インスリン分泌不全を呈する2型糖尿病患者に対する治療には、スルホニル尿素 (SU) 薬が広く使用されている。SU薬は、膵β細胞のATP感受性カリウム (KATP) チャンネルの調節サブユニットであるSU受容体に結合し、KATPチャンネルを閉鎖して、インスリン分泌を促進する、これに加えて、最近われわれは、SU薬が環状アデノシン-リン酸 (cAMP) 結合タンパク質のEpacファミリーのメンバーであるEpac2Aに直接結合し、Ras様グアノシントリホスファターゼRap1を活性化してインスリン分泌を促進するというメカニズムを持つことも重要であることを報告した。しかしながら、Epac2AにおけるSU薬の結合部位は明らかではない。われわれは分子ドッキングシミュレーションを用い、U薬と結合するEpac2Aのアミノ酸残基を予測した。さらに、予測されたアミノ酸残基の重要性を、部位特異的変異導入法、Epac2A-FRETバイオセンサーの蛍光共鳴エネルギー移動 (FRET) の変化、およびSU薬との結合実験によりSU薬の結合部位がcAMP結合ドメインA (cNBD-A) に存在することを明らかにした。これらの残基は、Epac2AによるSU薬依存性のRap1活性化にも必要であった。Epac2Aに対するSU薬の結合は、cAMP濃度とSU薬の構造に依存していた。われわれのデータは、SU薬とcAMPがそれぞれcNBD-AとcNBD-Bに結合することでEpac2Aを協調的に活性化し、SU薬がEpac2Aを開放型の活性化状態として安定化することを示している。本研究はEpac2Aを標的とする新たな糖尿病治療薬の開発の手がかりとなることが期待される。



Author

神戸大学大学院
医学研究科
糖尿病・内分泌学
高橋 利匡 先生



神戸大学大学院
医学研究科
分子代謝医学
清野 進 先生

Message from the Author

本研究では、cAMP結合タンパク質であるEpac2AにおけるSU薬の結合部位と活性化機構を解明しました。本研究により、SU薬による糖尿病治療への理解が深まるのみならず、Epac2Aを標的とした新たな糖尿病治療薬の開発にも繋がることが期待されます。



©Amanda Schütz

編集部より

SU薬は、インスリン分泌を刺激することにより血糖値を低下させる糖尿病治療薬のひとつです。これまでの研究で、SU薬は膵臓のβ細胞膜上のSU受容体およびタンパク質Epac2Aに結合し、2つの経路でインスリンの分泌を促進していることがわかっています。今回の研究では、Epac2AがSU薬と結合するアミノ酸残基が明らかになりました。この構造を利用して、今後より効果的に作用する薬剤の開発など、糖尿病治療の発展につながるものが期待されます (サイエンス担当: 早川 威士)。

サイエンス日本語版ホームページ

サイエンス日本語版ホームページがリニューアルされ、さらに使いやすいデザインとなりました。Science等に掲載された最新の研究論文へ簡単にアクセスできます。メールマガジンの登録もこちらから! www.sciencemag.jp

ASCAは、Scienceを発行する米国科学振興協会 (AAAS) からの委託を受け、Science Japan Customer Service Officeとしてカスタマーサービスを担当しています。

ASCA Bulletin

アスカコーポレーション広報誌 ASCA ブレティン

■ 発行

株式会社アスカコーポレーション

・大阪本社

〒541-0046 大阪市中央区平野町1-8-13 平野町八千代ビル6F

TEL: 06-6202-6272 FAX: 06-6202-6271

・東京事務所

〒108-0073 東京都港区三田3丁目1-17 アクシオール三田4F

TEL: 03-6459-4174 FAX: 03-6459-4175

<http://www.asca-co.com/>

■ 制作・編集

株式会社アスカコーポレーション

ASCA Bulletin 委員会

・石岡 映子

・伊藤 聡子

・駒田 大輔

・佐藤 直人

・西田 沙織

・早川 威士

・原 由

■ デザイン

山本 千恵

■ 写真

久保 順一

■ 印刷

有限会社 新明印刷

■ 協力

神戸大学

American Association for the Advancement of Science

■ 発行日

2014年1月



IS 598064 / ISO 27001

■ 表紙：ツバキ

ツバキ (椿, *Camellia japonica*) は代表的な冬の花の1つであり、原産国は学名が示すとおり日本です。庭木として様々な品種が日本中に分布しており、古くから日本人の目を楽しませています。また、乾燥させたツバキの花は救急薬や健康茶として、種子は灯火用や食用のつばき油として利用されている身近な植物でもあります。



日本からヨーロッパに渡った花のなかで、西洋文化に最も影響を与えたのはこのツバキです。ヴェルディの「椿姫」に代表されるように、オペラや小説、絵画などヨーロッパ人の美意識を刺激し、特に上流階級には愛された花でした。私たち ASCA も日本を代表するような翻訳会社となり、世界で存在感を持ち続けられる企業になりたいという思いから今回の表紙イメージに採用しました。